「鴎外博士談片」をめぐって：大正9年の鴎外

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1987-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須田, 喜代次 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1568

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「鷗外博士談片」をめぐって

――大正九年の鷗外――

須田喜代次

大正九年一月十一日、諸新聞はいっせいに東京帝国大学経済学部助教授、森戸辰男に対する排斥運動の勃発を報じている。いわゆる〝森戸事件〟(注1)の発生である。以来各新聞紙上には、連日主として森戸支持派の学生や文化人の動きを中心に克明に事件の進展が報ぜられている。そして、十四日の森戸、ならびに森戸論文掲載誌である東大経済学部機関誌『経済学研究』の編集名義人であった大内兵衛両助教授の起訴を経て、早くも同月三十日には第一回の公判が開廷されるはこびとなった。その二日前の大正九年一月二十八日の『時事新報』に、次のような記事が見出せることを、本誌に「時事新報『文芸』欄目録」を連載中の池内輝雄氏にご教示いただいた。

▽鷗外博士談片▽

此頃は社会問題の本ばかり読んでゐるよ。日本のか？出版されただけのものは殆どみな読んだよ。博士だとか何だとかのよりは矢張り若いものゝ書いたものが良いやうだね。が要するに餘りいゝものはないね。室伏高信といふ人のが中で一番面白かつた。マルクスだとか其他獨逸方面の紹介はちと混乱してゐるやうなところもあるが英国へ渡ると頗るいゝ。ギルドソシアリズムなんか殊に明快で面白かつた。あの人なんかに何か書いて貰ふといゝね。何？、いゝやおれは書かないよ。第二の森戸になつちや困るからな。ハ、、、。ペリカンか。あれには騙された――と云つては

悪いが、まあそんなことだよ。あゝうちらから広告されちや匿名も何も有つたものぢやない。（傍点原文、原文総ルビ）

現岩波版鷗外全集未収録の右の「談片」は、短いものではあるけれども、帝室博物館総長兼図書頭時代の鷗外をうかがい知る資料が現在必ずしも多いとは言えないだけに、そうした鷗外の一側面を照射するものとして興味深い。以下右の記事に関連して補足的なことがらのいくつかを述べてみたい。

※　※

周知のように、大正八年暮から九年初めにかけての賀古鶴所宛鷗外書簡によって、当時の彼が「社会問題ヤラ普通選挙ヤラ色々大ニ研究」（大9・2・10付）していた様を知ることができるわけだが、そうした鷗外にとって森戸辰男の筆禍事件は人ごとではなかったはずだ。彼は事件報道のあった一月十一日に、早速「今日ハ森戸辰男ノ事件ガ新聞ニ出候」と賀古に書き送り、その中でクロポトキンの思想をごくごく大まかにまとめてみせ、引き続いて「森戸ハコレニ賛成シタノカ、ドウカ知ラナイ。賛成シタトスルト悪ク云ハレテモシカタガナイ。シカシ互助論ハ部分的ニ一顧スル価ガアル」と微妙な反応を見せている。

さらに一月三十日に桂湖村に宛てて添削を乞うた漢詩（「次韻川嶋氏慶治」）中の頸聯を、鷗外は「言辞純駁煩防撿　階級高卑企仰攀」としているが、これは彼によれば「頸聯ハ森戸事件ト階級争闘トニ候」ということだという。やはり鷗外の関心のありかがうかがえよう。

公判開廷直前の『時事新報』記者の訪問の目的も、時期的に見て該事件に対する鷗外の見解の取材、あるいはクロポトキンの思想に対する彼の考えを問うことではなかったか（たとえば一月二十五日の『読売新聞』に掲載された有島武郎の談話「クロポトキンの印象と彼の主義及び思想に就て」のように）とも想像してみたくなるのだが、鷗外はここでは賀古書簡に洩らした程度のことすらしゃべらず、「第二の森戸になつちや困るからな」と笑いにまぎらせている。

また「談片」中には「室伏高信」の名が見えるが、「ギルドソシアリズム」云々などのことからして、おそらくこの時の鷗外の頭にあったのは、発行されたばかりの『中央公論』（大9・1）に掲載された室伏の論文、「デモクラシーの制度を論ず（新政治制度の提唱）」であったのではあるまいか。同論文は「労働階級の治世において政治的デモクラシーの制度としての代議制度が、縦令それが普通選挙の段階（ママ）にまで到達してゐるにしても、真にデモクラシーの制度として、デモクラシーの精神とその必然的要求とに奉仕することができるかどうか。デモクラシーの発達とデモクラシーの制度との関係如何」について述べたものであり、こうした点も当時の鷗外の関心に合致していたと思われる。明治二十五年生まれの室伏は、当時数え年二十九歳だったはずだ。そしてこうした鷗外の巾広い目配り、勉強ぶりが「観潮録」というノートに残され、やがては「古い手帳から」（『明星』大10・11～大11・7）に結晶するはずであったのだろう。

※　※

「談片」は最後に話題を一変して「ペリカン」について触れている。

現岩波版鷗外全集は十八巻までに彼の文学作品中の散文を年代順に収録しているが、その十八巻末尾に置かれたこの作品は、大正八年四月に出発した白樺演劇社のための「白樺演劇社用台本」と銘打って、この年大正九年一月の『白樺』に掲載されたもので、大正五年一月の『演芸画報』に翻訳発表された「白衣の夫人」（リルケ）以来、久々に鷗外が翻訳の筆を執った、ストリンドベリ原作の戯曲である。

なぜ鷗外が久々の翻訳の筆を、しかも他ならぬ『白樺』のために執ったのかという事情に関しては、たまたま鷗外に原稿依頼が行ったと思われる大正八年秋が、『白樺』発行がスムーズにいっていなかった時期であり、『白樺』全一六〇冊中唯一の「合本号」（11・12月号）を十二月に出さざるをえないような状態であったせいか、『白樺』には何も触れられていない。したがって小堀桂一郎氏が「『白樺演劇社用台本』と題してあるところから白樺同人の依頼によつて訳出されたものと思はれるがその間の事情は分らない」（『森鷗外―文業解題（翻訳篇）』〈岩波書店〉）とされた以上のことは言えな

いのだが、この時点までの白樺演劇社の上演戯曲を振り返ってみると、まず大正八年七月四日、赤坂ローヤル館で行われた最初の試演には、武者小路の「二つの心」とともにストリンドベリ作・鷗外訳の「パリアス」が、また九月十七・十八・十九の三日間に渡っての有楽座における第一回公演においては、ゲーテの「兄弟」（関口存男訳）とともにやはりストリンドベリ作・鷗外訳の「稲妻」が上演されている。特に有楽座上演の際には、各新聞の劇評にも取り上げられており、かなりの反響を呼んだことが分かる。演劇社の実務を担当していた岩淵甚四郎[注2]の「第一回公演が、嘗つて日本の劇壇に見なかつた、異常な素晴らしい成功を収めたことは、何よりうれしい」（「演劇社記事」『白樺』大8・10）という自画自讃的な発言も、こうした反響をふまえてのものであったのだろう。さらに岩淵は「そればかりでなく稲妻を見て、これまでストリンドベルヒの作品に対して、さう愛を感じなかつたり、感じてもそれ程でなかつたりした人達が、今更のやうにハツキリ、ストリンドベルヒの偉大なのに驚いたといふことだ」（同）と述べており、こうした見解が、再々度ストリンドベリ作・鷗外訳の台本を彼ら演劇社同人に要求させたのではないだろうか。

ところで、鷗外はこの作品を、前年（大正八年）十月三十一日から十一月二十二日まで正倉院曝涼のために出張していた奈良の宿舎で訳出している。[注3]そして、作品末尾に「附記」を付し、いくつかの語彙についての考察を加えたあと、彼は「大正八年十一月　　奈良客舎に於て　　源高湛識す」と認めたのである。この「源高湛」が「匿名」としてどれだけの効果があったかは疑問だが（すでにこの名を使っての作品発表もあるので）、とにかく一応「森林太郎」もしくは「鷗外」の名は伏せられている。ところが作品掲載号の「編輯室にて」の冒頭に、「○森鷗外氏が特に白樺演劇社の為めに、ストリンドベルヒの脚本ペリカンを訳して下すつたことは、御厚意を有りがたく思つた」（署名「小泉」）とあり、源高湛が鷗外その人であることが明らかにされている。「談片」の「あゝうちらから」云々はこのことを指しているわけである。因みにこの作品は翌大正十年七月、善文社より一脚本名著選集　第一編」として刊行されることになるのだが、その際「源高湛識す」は「森林太郎」に改められた。

※　※

この「ペリカン」は演劇社同人には好感をもって迎えられたようだ。掲載翌月の大正九年二月の『白樺』・「演劇社記事」に、近藤経一の言として「ペリカンは実に恐ろしいものだと思つた。よむだ人は（自分の知つてる人で）皆興奮して居た。俳優でない人まで、『あれならやりたい』など〻云つて居た」とある。ところが「まさにストリンドベリならでは考へられぬほどの、凄じい女性呪詛の悲劇」（小堀桂一郎、前掲書）であるこの作品を演ぜられる俳優がいなかったようだ。近藤はこう呼びかけている。「たゞ難〻はあの『母』だ。あの役をやれる女さえあればいゝのだが、自分は思ふ、今の日本にあの役をやり得る女優はあるかと、女よ出て来い、いゝ女出て来い。日本の女の為めに。いゝ女よ、出て来い。偉い女よ、出て来い」と。

その後も「ペリカン」上演への意欲は見せながらも（「四月中旬神戸で公演を演る。（略）（二の替りに『ペリカン』を出したいとも思つたが、稽古や舞台装置の上で無理なやうだから、止めることにした）」〈「演劇社記事」『白樺』大9・3〉、以後大正十年十月の演劇社解散まで、結局この戯曲は上演されることなく終わってしまった。十年十月号の『白樺』に「演劇社解散の事」なる一文を寄せた長與善郎もこの作品について触れ、「せめて演劇社の為めにわざ〳〵鷗外さんが訳して下さつた『ペリカン』丈けでも演つて止し度いと思つたのであるが」と残念がっている。

ただ先の岩淵甚四郎が、白樺演劇社の二期生と大正九年十月に青騎手小劇場を結成、大正十一年六月、丸の内鉄道協会で催したその第四回試演会（「青騎手小劇場」としての最後の試演会）において「ペリカン」を上演し、長年の夢を果たしているようだ。(注4)

大正十一年六月、それは鷗外の死の前月ということになる。

（注1）森戸事件のあらましを、手近にある高柳光寿竹内理三編『角川　日本史辞典』（角川書店）から引用しておく。
「一九二〇（大正九）の東大経済学部機関誌『経済学研究』創刊号に掲載された東大助教授森戸辰男の論文『クロポトキンの社会思想の研究』をめぐる筆禍事件。上杉慎吉教授を中心とする学内右翼団体興国同志会一派が森戸論文を危険思想の宣伝として、官辺に働きかけ、二〇、一月、森戸および同雑誌の編集発行人大内兵衛助教授は朝憲紊乱・新聞紙法違反として起訴され、大学の職は休職となり、未発売の雑誌は回収された。公判の結果有罪となり森戸は禁固三か月・罰金二〇円・執行猶予二年。学界・言論界に対する弾圧事件として非常な反響を呼んだ。」

（注2）「今度、岩淵といふ人が来て万事白樺演劇社の事務を取り扱つてもらえる事になつた。実際的の経験を非常にもつて居る人で、此方なんかにはとても幾日かかつたつて、なか〳〵出来そもない事を、どん〳〵やつて呉れる」（「演劇社記事（署名近藤）」『白樺』大8・7）

（注3）大正八年十一月十一日付、奈良発山田珠樹（同年11月27日、鷗外長女茉莉と婚姻）宛書簡において、「ペリカン」中の語彙に関する調査を、鷗外は珠樹に依頼している。

（注4）大笹吉雄『日本現代演劇史大正・昭和初期篇』〈白水社〉